

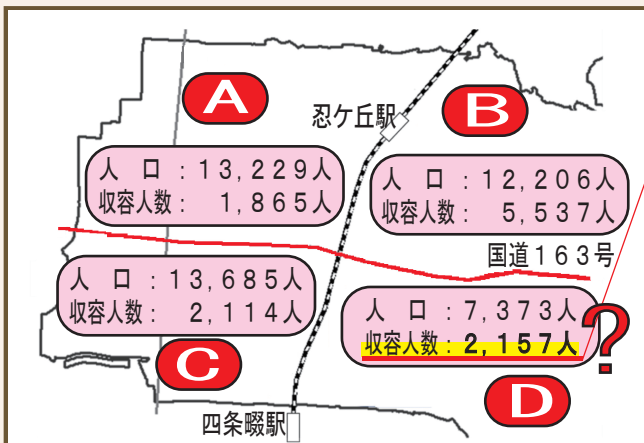
長畑ひろのり News vol.146

(C) 2013 Kohama Studio

12月定例議会における質問①

・災害時の対策（指定避難所）について

本市西部地域において、ＪＲ片町線と国道１６３号でわけた４カ所（Ａ．Ｂ．Ｃ．Ｄ）における人口と指定避難所の収容可能人数は、現在下記の通りとなっています。しかし、この人数に疑問を感じたため質問をし、主な内容のみを報告します。



【長畑質問】４カ所それぞれの指定避難場所は。

【都市整備部長】Ａ：岡部小学校・西中学校、Ｂ：畷小学校・忍ヶ丘小学校・畷中学校・市民総合センター・電気通信大学、Ｃ：くすのき小学校・南小学校・四條畷高校、Ｄ：東小学校・旧南中学校・四條畷学園となっている。

【長畑質問】東小学校と旧南中学校についての見解は。

【都市整備部長】東小学校と旧南中学校の一部は土砂災害警戒区域内だが、土砂災害が予想される場合は、避難所として全部または一部を使用しないことを前提に指定している。

【長畑質問】旧南中学校の一部利用に関して詳細な説明を。

【総務部長】構造上３棟に別れており、西棟の全てと中央棟の約半分が土砂災害警戒区域外に立地している状況となっている（東棟は全て土砂災害警戒区域内）。

【長畑質問】より安全を考え、土砂災害時に中央棟と西棟は１階部分をピロティとし、２～４階の運用が良いと考える。

【長畑質問】大阪市立大学建築工学の教授に聞き取りした時のメモに、旧南中学校の建物は「断層帯から約１８ｍ離れており、かつ、耐震補強時のＩＳ値が０．７以上あるので、校舎

については利活用可能」と書かれている。しかし、土砂災害を考えれば東棟は使わない方が良く考える。また「エキスパンションジョイントの幅が狭いので、地震時に破壊する可能性がある。ある程度の隣接棟とのクリアランスがあれば良い」とも書かれている。つまり、揺れの大きい地震時、最悪の場合は中央棟と西棟が衝突し、程度こそわからないが建物が破壊する可能性があると考えられる。であれば、現段階で中央棟は指定避難所には含まない方が良く判断する。以上のことから、改めてＤにおける指定避難所の収容可能人数は。

【都市整備部長】旧南中の西棟一部と学園で計１，４５５人。

【長畑質問】その人数で、ＢとＤの収容可能人数の割合は。

【都市整備部長】Ｂで４５．４％、Ｄで１９．７％となる。

【長畑質問】土砂災害を考えた場合、山側の地域は収容可能人数が多いほど良いと思うが南側はあまりにも少ない。四條畷学園に避難しようにも、大東市民で一杯かも知れない中、現在の状況では旧南中学校の校舎を利用するしかない。そこで、新たに示された旧南中学校の跡地の計画は、当初ホールのあった床面積６，０００㎡から３，８００㎡と変更になったが、避難時の収容人数は何人から何人に減ったのか。

【都市整備部長】２，５４５人から１，６１２人となった。

【長畑要望】阪神淡路大震災を思い出すたびに、市民全員が避難できる場所の確保が必要と考えるが、そこまで求めるのは現実的でない。それらを踏まえ、この議会では個別施設計画の前段階としての避難所機能に絞って質問をした。どの施設を旧南中学校の跡地に集約するののかについては今回触れなかったが、行政の提案してきた最低でも３，８００㎡の床面積の建物、できれば、それ以上に床面積は上げて欲しいと願う。この先、自然災害の規模が大きくなると想定できる中、この機会に確保しておくべきと考えるのが理由。

また、指定避難所は「ほとんどが学校」となっている。しかし、学校を利用するのは、それこそ数日でなければ児童生徒達への影響は計り知れない。そう考えれば、旧南中学校の跡地、市民総合センターの敷地ほど最適な場所はない。

仮に、旧南中学校の跡地に避難所機能を持った複合施設を建設した場合、空き地部分には、かまどや仮設トイレ、仮設風呂も可能でヘリポートまで設置できると思う。是非とも、旧南中学校の跡地に、平時は文化を発信したり地域住民の憩いとなる場所を兼ねる指定避難所の建設を要望する。

毎月発行している“長畑ひろのりNews”を、約半年ごとに送っています。送付の必要な方は、送付先をFAXもしくはe-mailにてお知らせ下さい。

長畑ひろのり事務所 FAX 072-877-1280

e-mail sky@nagahata.jp

<http://nagahata.jp>



Instagram

mixi

twitter

facebook

ココロ

以下の記事は前号からの続きで、中曽根康弘元首相が四條畷町の時代に影響を与えた原子炉問題についてです。内容は10年前の私の市政報告からで、少しだけ手を加えています。

「四條畷町原子炉問題」について②

建設までの流れは
下記の通りです。

昭和38年12月31日の
朝日新聞の記事より引用

- 31年11月 京大、阪大、日本学術会議などによる関西研究用原子炉設置準備委員会が発足。
- 32年 1月 宇治市の国有地が第1候補地に決まる。
8月 高槻市阿武山が第2候補地として浮ぶ。
11月 文部省が原子炉の敷地選定を大阪府原子力平和利用協議会に依頼。
- 34年 3月 大阪府は第3候補地として交野町星田を発表。
12月 四條畷町が第4候補地にクローズアップ。
- 35年 4月 民間団体を加えた「大学研究用原子炉設置協議会」が発足、四條畷案は白紙に戻す。
- 35年 5月 熊取町が原子炉誘致を設置協に申入れ。

候補地も各地で反対を受けましたが、熊取町に落ち着きます。ただ、この場所も昭和35年7月に隣接する泉佐野市が反対期成同盟を結成、同市議会も反対を表明し問題となります。しかし、設置協小委が提示したあっせん案を反対期成同盟が受託した事で決着、昭和38年に施設は建設されました。

この施設の名称は「京都大学原子炉実験所」と言い、45年経った今も、建設当初の目的通り全国大学の共同利用研究所として大阪府熊取町で研究施設として稼働しています。

四條畷では町長リコールまで発展した研究用原子炉建設でありながら、熊取町は誘致をしました。その事で目に見えるメリットが当時からあったのでしょうか、政治的判断の中でもっと先を見据えた理由があったように感じます。

現在、京都大学原子炉実験所の研究成果を還元すべく“熊取町、府、京都大学”との三者で取組んでいる構想の一つ、中性子がん治療の研究が先端医療開発特区に採択され、熊取町はその先端医療の拠点作りを目ざした取組みを進めています。

四條畷にとって建設の是非はどうだったのか、今考えても判断の難しい歴史のひとつコマでした。

当時の朝日新聞の
記事より引用

人文字描いて祝う 京大原子炉実験所開所式 紋つき姿のお百姓も参列

【熊取町＝大阪府】ボン、ボン、ボン勢いよく打ち上げ花火があがって、八日朝、大阪府泉南郡熊取町京大原子炉実験所は花やかな開所式を迎えた。空には「祝原子炉実験所開所式」のアドバルーンが五つ曇り空に浮び、

紅白のまん幕をめぐらした正門アーチをくぐって参会者の列がつづいた。京大、阪大をはじめ、各地の大学からかけた学会、財界の代表、さらに地元の人たちがぞくぞく。「あの玉ねぎ畑がこんなになって」紋つき姿の元地主のお百姓さんが、立ち並んだ近代的な建物に目を見張る。「さあこれからいよいよ共同研究が始まるんですなあ」晴れ晴れと語りあう学者たち。

関西に研究用原子炉の設立が計画されてから八年目、各地の候補地ではげしい反対運動が起ったことなどを思い出し、せぬくらい開所を祝う式典は明るくなごやかにあげられた。この日一番乗りは平沢興（こう）前京大総長。「候補地が決まらず、総長時代に生み出した。それだけに苦しみをした。それだけに気分」をかきたてた。

この日が待遠しくて……とニツコリ。前夜遅くまで総出で飾りつけや会場の準備をして待構えていた所員の一人一人と固い握手をかわし「ほんとうにご苦労さま、でもこれからが大変ですね」と励ましのことをばを残して灘尾文相らと所内を熱心に見て回った。

地元熊取町の熊取小学校でこの朝、千七十人の全校児童が約九千平方メートルの校庭いっぱい人文字を描いて開所を祝った。一、二年生が「一九六四・七・八」三、四年生が「ゲンシロ」五年生が「祝」それに六年生が同町の町章。全児童が運動衣に赤、白の帽子をかぶり、両手に持った日の丸の小旗をふつてのお祝い。同町も花火を打ちあげて景気づけ、町民たちに「原子炉の町気分」をかきたてた。

議場の紹介

